



## 漱石と倫敦塔

（ロンドン塔を訪れる（上））

夏目漱石がロンドンに一年、三十三歳の時である。留学したのは明治三十三年、二年後に帰国、三十八年



毎回多くの受講生が参加したかつむり大学

に「吾輩は猫である」とほぼ同時に「倫敦塔」を書き、作家としての地歩を固めた。

今回、ロンドンを訪れるにあたり、最初に頭にはロンドン塔である。ロンドン市内にある四つの世界遺産の一つだからでもあるが、漱石の短篇「倫敦塔」のことがあったから

山口放送に勤めていた時、梅光女学院大学の佐藤泰正文学博士を招いて文学講座「KRYかつむり大学」を月一回、下松市のザ・モール周南で開いていた。最初は「漱石十二夜」と題して十二回の予定だったが、好評で結局百回開いた。平成十一年五月、第六十五回目が「倫敦塔」である。

無声映画時代の弁士のように熱のこもった佐藤先生の解説に酔う。そして、もしロンドンに行くことがあったら、ぜひ、ロンドン塔に行こうと思

ったことを思い出す。今回、出発前にその回のテープを聞き、さらにロンドン塔についているいと調べた。今はロンドンまで直行便の飛行機

なら半日で行ける。漱石性は斬首は船で五十日かけてロンドンに到着し、三日目にロンドン塔に行っている。作品にのだから、よほど関心が出て来た強かったものと思われる。が、多

ロンドン塔は一〇九七分、ヘンリー年、ウイリアム一世により七世の

つて築城され、現在の形曾孫ジェ

が完成したのは十三世紀

後半。当初は要塞として

造られたが、実際には王

の居城として使用された。なるが、ヘンリー八世の王

しかし十五世紀後半から

は監獄に転用され、宗教

上の異端者、王室への反

逆者の幽閉、処刑の場と

なった。

ロンドン塔には王室の

宝飾品や中世の武具など

も展示してあるが、漱石

の「倫敦塔」にはその種

のものは一言もない。つ

まりロンドン塔を訪れて

書いたのは「幽閉者」に

の場、処刑の場としての

ロンドン塔であったの

に違いない。「倫敦塔」

の挿絵も掲載のように女

塔」と漱石は書く。

で殺されたのである。

王位継承を巡る権力争

い、悲劇の場、ロンドン

塔。漱石はこの塔を一回

だけ訪れ、史実と空想を

もとに「倫敦塔」を書い

た。この作品を通して読

者に何を言おうとしたの

だろうか。「冷然と二十

世紀を軽蔑するように立

って居るのがロンドン

私を訪れた時は小雨が降

っていた。

いずれにせよ観光気分

で見える気持ちにはなれな

い。何とも重苦しい。

佐藤先生によると、漱

石がロンドン塔を訪れた

日の天候を調べると快晴

だったと言う。しかし漱

石は「塔はどんよりとし

た雲に覆われた」と書い

ている。ロンドン塔が歩

んだ歴史を考えると快晴

はふさわしくないと思っ

たのだろう。人間の陰湿

な権力争いや、誰もが有

限のはかない命であるこ

とを語るには快晴は確

かに場違いな気がする。

私を訪れた時は小雨が降

っていた。



漱石全集(岩波書店)の「倫敦塔」の挿絵